



あいのその 2022 年 5 月号



初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である

(創世記 1 章 1～5 節)

愛の園保育園 042-325-1045

皆さんこんにちは。今年度より国分寺教会に赴任しました牧師の西脇と申します。どうぞよろしくお願いいたします。その最初の巻頭言を書かせていただきますが、最初といえば、聖書の中で神が最初に言った言葉はなんですか？答えは「光あれ。」です。世界はまだ創られておらず、混沌と闇だけがありました。そこに神が「光あれ」と言ったことで光が出現し、これが昼となり、闇は夜と呼ばれるようになったというのです。そしてここから、あらゆる天地万物が創造されていたということを語るのが、聖書の中の天地創造の物語です。

私たち人間も含めたすべての被造物を神が創ったとするのがユダヤ教やキリスト教の信仰の基本です。そしてこのことは昔から“科学と宗教との対立”といったかたちで論争されたり、「だからキリスト教は信じられない」「聖書なんてデタラメだ」と言われたりすることのひとつの要因となってきました。

しかし、そもそも創世記という書物は、宇宙史とか地球史ではありません。宇宙や地球、生物の誕生に関する客観的事実は、そのすべてがまだ解明されていないとしても、ある程度まで科学が説明してくれるでしょうし、まだまだ研究され続けていくことだと思います。しかし、人間とは何か、世界とは何か、私たちはどのように生きるべきか、ということに対しては、たとえどんなに科学技術が発展したとしても、決して答えが出るものではありません。そして、このことこそ、聖書が私たちに対して語りかけているメッセージなのであり、伝える意図が違うのですから、科学と宗教は何も対立などしていないのです。

神は自身で創った光を見て「良し」とされたとあります。うん、これはとってもいいものだ、うまくいったと、神が満足し、祝福しているということです。そして、のちの新約聖書の時代になって、その神の子としてあなた方は生きなさいと聖書は語ります (エフェソの信徒への手紙 5 章 8 節)。それはつまり、私たちひとり一人もまた、神によって生を与えられ、良しとされ、祝福を受けている者としてこの世界に生かされているのだ、ということなのです。

(牧師 西脇 正之)